

巻頭言—ビッグデータ時代へ

八巻 直一†1

ビッグデータは、今日の時代を彩る語として目立った存在といえよう。単語としてビッグデータは、データマイニングなど一部の分野で使われてきたが、一般的に広く使われるようになったのは、2010年頃からはないか。以来、未来を拓く新技術のキーワードの一つとして、あらゆる分野で頻繁に使われるようになった。しかし、正確な定義となると、はなはだ不明確であり、一種のはやり言葉の域を出ているのかどうかあやしい存在でもある。超大規模サイズのデータをこそ意味する、という見解があるかと思えば、世に広く収集可能な多様なデータを指す場合もある、という具合である。

一方、主として大型データを取り扱うことから、情報系業界では新しいニーズの掘り起こしが盛んにおこなわれるようになり、ビッグデータ利用システムの開発合戦の様相も出現している。最近のAIブームやIoTの動きも、ビッグデータ時代への大きな流れを後押ししているようである。かくして、定義はあいまいながら、とにもかくにも「ビッグデータ時代」に突入してしまった感がある。

このような時代背景の中で、日本ソーシャルデータサイエンス学会は、いくつかの使命感を持って発足したものである。学会名称に込められた文字列に、ビッグデータは含まれていない。「ビッグデータ」として社会的に拡散している単語を用いることで、学際性が損なわれることを危惧したためである。「ソーシャル」を含めたのは、社会的現象の分析に軸足を置きたいとの意思をこめたものである。

産業界の状況は依然として厳しく、商工業全体はマーケットの縮小にあえいでいるのが現状であり、今やビッグデータは、閉塞状態の打開への期待のキーワードの一つとなっている感がある。しかし、理論的裏付けを持たないデータ解析は、かえって副作用を招きやすく、コンピュータ黎明期の業務情報化の流行を見るがごとしである。かの時代にあっては、プリンターから打ち出される大量の数字列が、あたかも神の啓示のごとくありがたがられる向きさえあった。そういう時代と、今日のAIやビッグデータの流行に、相似形を見ることが出来る。業界の閉塞感という意味では、情報系産業もまた然りである。しかし、各種エンジンの出現と、自らが持てるデータ取扱い技術を背景に、理論的蓄積が不十分なままデータ解析やAIに経営資源を振り向けるのは危険である。

学会発足の使命とは、上述の壁の打開である。すなわち、

社会的データの活用における、データ解析手法の普及・啓蒙、特に情報系産業に蓄積されたデータ取扱い技術を、真の意味でデータ解析ビジネスに振り向ける基盤の醸成である。ここでいう情報系産業とは、主として中小ソフトウェアハウスである。中小ソフトウェアハウスは、日本の産業基盤を支える重要なプレーヤーでありながら、長く下請け構造に取り込まれてきており、大企業を取り巻く景気にもっとも敏感に影響を受けてきた。しかし、データ解析は自立への大きな武器となる可能性を秘めており、ぜひ学会として貢献したいと考えている。

学会では、これまで3回シンポジウムを開催してきた。

第一回は2014年11月29日に、CIC国際会議場（東京田町駅前）で開催された。統一テーマは、「ビッグデータ時代への夢～データ解析とその応用～」である。

基調講演は北川博之氏による「ビッグデータ時代のデータ工学研究の展開」、特別講演は明智憲三郎氏による「戦国史研究とデータベース利用の実情」、および宇野毅明氏による「ビッグデータをわかりやすくする～データ研磨が拓くデータ解析の未来～」であった。

第二回シンポジウムは、統一テーマを「地域創生とビッグデータ」とし、2016年3月5日6日に鹿児島大学郡元キャンパス、稲盛会館でおこなわれた。

基調講演は、三浦聡氏による「キャッシュレス決済とビッグデータ活用について」および成尾雅貴氏による「100年後も愛されるキャラクターを目指して」。特別講演は、井村隆介氏による「火山噴火とその防災」、若林毅氏による「ICT活用による地域イノベーション」であった。一般講演は13件であった。

第三回シンポジウムは、統一テーマを「ものづくりとビッグデータ」とし、2017年2月4日に静岡県浜松市アクロシティ浜松で行われた。

基調講演は晝間日出男氏による「地方創生と音楽のビッグデータ」であり、特別講演は、木谷友哉氏による「走行する二輪車で作るセンシング基盤」、川野俊充氏による「第四次産業革命で進む製造業でのIoTとビッグデータ」、関伸一氏による「中小ものづくり企業とIoT」であった。一般講演は5件であった。

過去3回のシンポジウムの発表内容を顧みると、多岐にわたっていることに気付く。データ解析の対象と研究分野

†1 静岡大学 名誉教授 (連絡先: yamaki_naokazu@yahoo.co.jp)

は、相当にすそ野の広いものであること、とくに、歴史の研究や自然災害の研究にも大きな成果が期待できることは、学会の貢献分野へのヒントとなる。

第一回シンポジウムの趣意説明に、「日本ソーシャルデータサイエンス学会は、溢れるソーシャルデータを適切に活用して、より暮らしやすい社会を築く科学の発展と応用を考える場として設立されました。同じような動機の学会や団体活動はすでに複数存在しますが、本学会は『子供たちへの教育』『ビッグデータ活用活動の実施』に重点を置くもので、会員の学術的業績の発表場所としてよりも、学会自身が積極的に社会貢献活動を展開することを目的としております。」とある。また、第三回の趣意には、「浜松は、日本を代表する工業都市であり、自動車産業をはじめ、『ものづくり拠点』が集積しています。本学会では、ものづくり拠点浜松におけるIoTの発展と、それに伴うビッグデータ解析とその活用に注目しております。『ものづくりとビッグデータ』は、これからの産業の方向を示すテーマであり、必ずや貴重な知見を提供できるものと自負しております。」とある。この二つの趣意文に本学会の意思が込められている。

一方で、学会の主要な活動として、学際的な社会貢献は無論外せないことも事実であり、冒頭に指摘したように、「ビッグデータ」の認識の曖昧性を払しょくする再定義に始まり、学問体系として確立することは重要事項である。ビッ

グデータがはやり言葉から真の意味で脱却して、社会的役割を果たすに足る理論的進展が、最大関心事でもある。

本論文誌は、理論的貢献に資するべく準備されてきたものである。第一巻の内容を観ると、予想にたがわず非常に広範な対象と分析であり、データ解析分野のカバーすべき対象の広さを改めて認識させられる。内容的にも、非常に興味深いものが掲載されたことは、学会として大変喜ばしいもので、創刊号への投稿をいただいた著者諸氏に感謝するものである。学会誌は電子的に公開する方式とし、広く参照可能であることを重要視しており、今後もこの形態を維持する方針である。皆様からの有益な論文の投稿を、今後も大いに期待したい。

冒頭に掲げた学会活動の大きな柱である社会活動として、「教育部会」をはじめ、「オープンデータ部会」、「セキュリティ部会」、「データ解析部会」などが活動を開始しており、今後活動を強化して、社会貢献なかんずく教育・啓蒙が広がることを節に願っているところである。その成果の一つとして、2017年2月から3月にかけて、「データ解析入門」講座を浜松で開催することとなった。本講座は浜松ソフトウェア産業協会が主催し、静岡大学大学院事業開発マネジメントコースと本学会が協賛形で実施されるが、講師と内容は本学会員によるものである。

今後の学会活動にさらなる支援とご協力を賜りたい。

現在活動中の研究部会一覧

人材教育研究部会（主査：中野 光義：(株) サン・パートナーズ）

オープンデータ活用研究部会（主査：水野 信也：静岡理科大学）

人工知能研究部会（主査：桑田 喜隆：室蘭工業大学）

データ解析研究部会（主査：稗田 隆：岡山大学）

情報セキュリティ研究部会（主査：森 邦彦：鹿児島大学）